す。四角や丸などのさまざまな形の穴が多数発見されていますが、これらは柱の跡を示しています。たくさんの柱の跡がありますが、これらはすべて奈良時代後半、すなわち大極殿が解体され、基壇も削られた後に建てられた建物のために掘られた穴です。大極殿の痕跡は、**図8**で、黒く塗ってある溝です。これが発掘調査で得られた、大極殿に関する唯一の情報です。

図9は、大極殿の西半部を発掘調査したときの写真です。柱が立っていたと推定される位置に人間が立っていますが、その下には遺構はありません。これについては、後で説明します。そして、四隅に人が立っている場所が、基壇のコーナーにあたります。

図8で、溝状に少し色（灰色）をつけている部分が基壇の範囲です。基壇の一番下の石を据える場合、土の上に置くのではなく、地面に少し溝を掘って、そこに石を置いて、石を半分程度埋めます。そして、石を取り除くときも、石の両側から溝状に掘ります。その痕跡が残っているのです。それが大極殿に関する唯一の情報です。では、そこから、どのようにして建物を復原したのかを説明します。

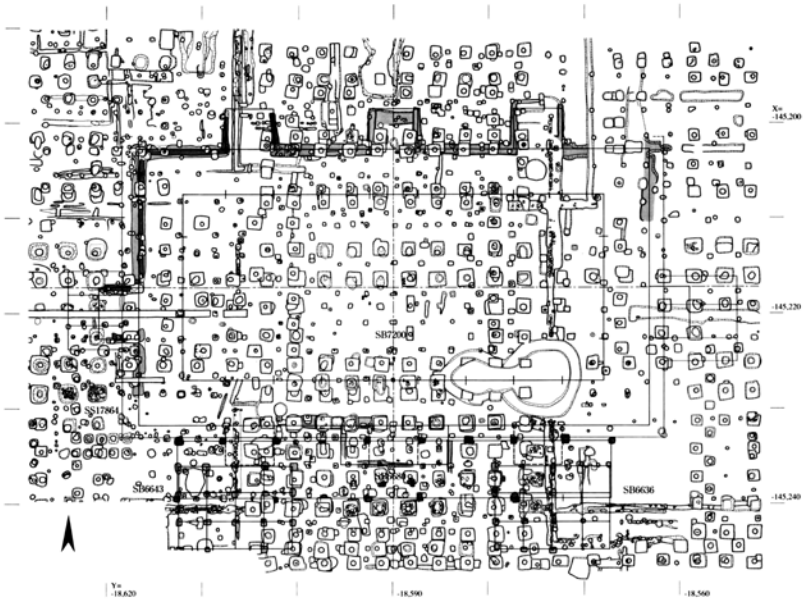


図8　大極殿部分の発掘遺構平面図

図9　第295次調査

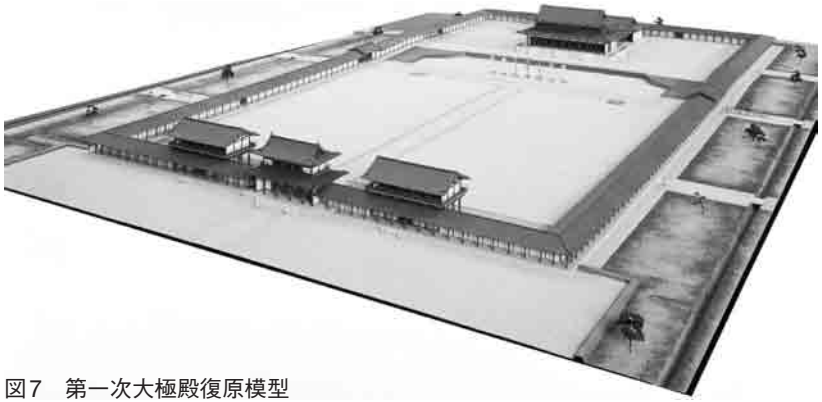


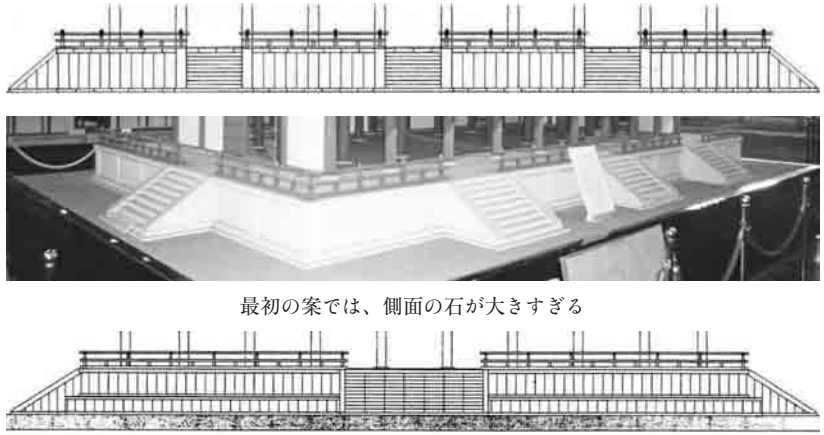
図7　第一次大極殿復原模型

第一次大極殿の復原の検討

一、基壇の高さと形式

平安時代末期に描かれた『年中行事絵巻』には、平安宮の大極殿が描かれています。平安時代のなかでも大極殿が何回か建て替えられていますが、絵巻に描かれているのは平安時代末期の大極殿です。この絵巻をみると、基壇は、上下に石を横に平行に並べ、そのあいだに石を縦に並べた構造であったことがわかります。そして、大阪府柏原市にある河内国分寺から出土した基壇などを参考にしながら、まず、基壇の高さを検討しました。大極殿の発掘調査では、基壇の一番下の部分の位置しか確認されていませんが、階段の長さが判明しているので、階段の角度を決めることができれば、必然的に基壇の高さを求めることができます。いくつかの基壇の発掘事例を参考にしながら、階段の角度・形状を検討しました。

当初、図面を描く段階、模型をつくる段階では、**図10**の上や中間に示す形状と考えたのですが、実際に建築することを考えると大きな問題が生じました。一番長い階段では四・五メートルもある



最初の案では、側面の石が大きすぎる

基壇を２段にして、石の大きさを小さく

図10　検討段階の基壇・最終決定案

ので、これから基壇高を復原すると、基壇の縦方向の板石の長さが三メートルにもなります。このような巨大な板状の石をそろえてつくることは技術的にまず無理と考えました。そこで、基壇の高さを約三メートルとしながら、基壇を上下二段に分割して、縦方向の板石を小さくするように考えました。その事例として、法隆寺金堂があり、その基壇が二段になっています。すなわち、階段の勾配を決め、高さを決め、一段では無理なので二段にした、という流れで基壇を復原しました。

二、礎　石

平城宮には、大極殿の痕跡がほとんどありませんが、大極殿は奈良時代の中頃に、現在の木津川市にある恭仁宮に移築されました。そして、その恭仁宮大極殿跡の発掘調査から、四隅だけには硬い花崗岩を使用し、その他では軟らかい凝灰岩が使用されていたことがわかりました。これを参考に大極殿の礎石を復原しました。

図11でみていただきたいのは、凝灰岩の礎石の隅の欠き取りです。これは基壇上面に石を敷くときに彫られたものと解釈しました。基壇上面の石の敷き方には大きく分けて二通りあります。一つは、『年中行事絵巻』にあるように、斜めに四角の石を敷く四半敷きという方法です。もう一つは、建物に平行にまっすぐに敷く方法です。恭仁宮大極殿跡の礎石の欠き取りを検討すると、**図12**に示すように、建物に平行に石を敷き、目地の